

東京大学 総合図書館 準漢籍目録

山本 仁編「東京大学総合図書館準漢籍目録」に続く待望の続編である。本目録は一五〇〇点にも及ぶ準漢籍を整理・分類し、書誌的解説と請求番号を示す。本編と附録の二部から成り、本編には準漢籍を附録には準漢籍に準ずる図書を収録A5判 三六八頁 定価一、二六〇〇円

浮世絵大事典 重版出来

国際浮世絵学会編 絵師や作品・画題だけでなく幅広く最新の研究成果を盛り込み、総項目は一六三三項目にも及ぶ。一冊にまとめた初の大事典。 定価二、九四〇〇円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフトである。◆詳細内容見本進呈◆ 価格二、九四〇〇円

東京の散歩道

読売新聞東京本社地方部内信課編 江戸の文化を今でも残す地域や大都市の癒しの空間を残す東京の「隠れた名所」スポット一四一ヶ所をカラーで紹介。定価一、九八〇〇円

老いの愉楽——「老人文学」の魅力——

尾形明子・長谷川啓編 「老い」をテーマにしてさまざまな角度から描かれた作品と作家を読み解く。「老い」の文学を愉しむガイドブックとして最適。定価二、七三〇〇円

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17 (価格は税込)  
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746 http://www.tokyodoshuppan.com

丁寧！読む古典

小松英雄 四才世 1995日  
本古に古典は読めるのか。原典がもつ真のメッセージを解明してゆく。  
日記言語としての「日本語」の誕生  
その存在を問い直す  
福島直恭 A5世 2625日

詞書の語彙論

若林俊英 A5世 11560日  
和歌文学研究の未開拓分野、勅撰集、私撰集の詞書、左注の総合研究。  
五十音引 僧歴綜覧  
僧綱補任 僧名録  
推古世 二年 元暦二年  
監註 五才世 5775日

古今集の桜と紅葉

佐田公子 A5世 3676日  
「古今集」の桜と紅葉の歌を解読した初の試み。日本人がみえてくる。  
王朝物語史論  
引用の「源氏物語」  
星山健 A5世 9240日

「源氏物語」時代の音楽研究

中世の楽書から  
磯水敏 A5世 13125日  
源氏成立前後から中世にかけての文献を用いて実証的に解釈、宮廷音楽に迫る。源氏中の音楽表現一覽付き。

徒然草論

稲田利徳 A5世 18900日  
徒然草の成立から享受までを考察した。著者渾身の徒然草研究集大成。  
お伽草子 百花繚乱  
徳田和夫編 謝5世 16760日

（歴史）を創った秋田藩

モノガタリが生まれるメカニズム  
志立正知 四才世 8260日  
モノガタリの成立から（伝承）を通じて歴史へと機能する道筋を提示。  
江戸唐話用例辞典  
小田切文洋編著 B5世 15760日

豊富な用例で、江戸・明治期の日本人の唐話「近世中国語」受容の全体像を初めて明らかに。欠を埋める。

笠間書院 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331 (価格は税込)  
http://www.kasamashoin.jp/ ファクス03-3294-0996

国文学 2

特集 本当は知らない韓国

国文学 解釈と教材の研究

平成二十一年十月発行(毎月一回)発行日第五十四巻第七号(三月)  
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (通巻七八〇号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五四巻二号 二〇〇九年二月号

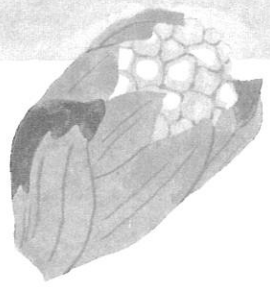
特集

本当は知らない韓国

- ◆キムチ、儀礼、ハンゲル、昔話
- ◆近くて遠い国「韓国」の本当の姿
- ◆石坂健治／金両基／宋実成／野間秀樹
- ◆姜連淑／榎本香織／谷晃／藤石貴代／林浩治

国文学

日本語・日本文学・日本文化 二〇〇九年 第五四巻二号 解釈と教材の研究



# 心意伝承

—遊働世界に生きる—

本莊雅一

第十七回 玉菱鎮石考④ 海翔ける人々

## トランス・パシフィック倭人

中学時代、社会の時間に、地図帳に載っている地球の海流や風向の図を見ていると、その流れや風に任せていればどこへでも行けそうな気になってきて、海洋冒険小説を書きたくなったことがある。

日本から黒潮に乗ってそのまま北太平洋をアメリカ大陸へと横断し、アメリカ西海岸付近を旅しながら南下。中央アメリカから赤道海流を使い、日本列島へ戻る予定が、北東の貿易風にさらわれポリネシアからオーストラリアへ。

そこからメラネシア・ミクロネシアの島々を縫い、ようやく日本への帰還を果たすはずが、よんどころない事情が生じてフィリピン、インド、アフリカへ向かう羽目となる。

そこから先はどうしようか、地中海へ出てカナリア海流に乗ってカリブ海。つまり中央アメリカへ戻って、もう一度赤道海流に乗りなおす。あるいは、アフリカ南部からギニア海流、ついでブラジル海流へと乗り継ぎ、南米の最南端まで流され、ドレーク海峡を渡って南極大陸に漂着。凍え死ぬ寸前から何とか脱出してペルー海流に乗り中央アメリカまで戻る。このほうがドラマチックか。

そこで友人たちと最後の別れをして、赤道海流に乗り、無事日本へ。

どうせ書くなら、人類の原始時代を舞台に、そのころまだ恐竜その他の絶滅種もいたことにして、海獣や鳥獣やアメンボの生態にヒントを得て、舷外浮材付き帆船をひとりの少年が発明し、それで海に乗り出す、という設定が面白いかなと考えていた。

水平線のぼる朝日に向かって、若竹のような肉体の原始少年が、アウトリガーヨットで出帆する。そんなシーンを思い浮かべるだけで、一人で感激していたものだった。

とりとめもない夢想到に浸り、ストーリーをメモするのは楽しかった。居眠りもせず、真剣な表情で教材に書き込みしている私を、教師もとがめはしなかった。テストで常に平均点以下であることに疑問を感じてはいただろうが……。

これはあくまでも、幼いころの自分の夢想であるはずだった。

ところが、夢想どころか、先史時代の人々が、環太平洋を循環するようにして交流していた「事実」の存在する可能性が、実はとっくの昔に学説として提唱されていたことを、最近になってようやく知った。

例によって、常識破りな説だから学界からは干され、学校の教科書では一行も触れられていない。ゆえに似たことを空想していた中学生に、かれの小学校就学以前にはすでに公表されていたその学説に、触れる機会は与えられなかった。そのまま二〇年も三〇年も、四〇年近くも経過していたわけである。

たんに不勉強だと言われればそれまでだが、恐ろしい

ことだ。「情報の氾濫」ということが、むしろ旧に旧体制にとつて都合のよい隠れ蓑になるかということ、まざまざと見せつけられた気がした。どうでもよい情報を垂れ流してすべてが自由選択といった開放感を人々に与えつつ、実は不都合なものは人目に付きやすいところへは絶対に「示さない」という手段である。

「倭人」による太平洋横断。

管見に入る限りで、これに先鞭をつけたのは歴史研究家の古田武彦である（『邪馬台国』はなかった）一九七一年 朝日文庫。以下、古田編著の『海の古代史 黒潮と魏志倭人伝の真実』（一九九六年 原書房）に依拠しながら、その学説の内容をまとめてみる。

まず古田は、『三国志』の「魏志倭人伝」に登場する「邪馬壹国」の「壹」の字を、近世期から現代に至るこれまでの学者がことごとく、何の論証も抜きに「臺」の字の誤りであるとして、「邪馬臺国」に書き改めてしまっていることに、危惧の念を抱いた（岩波文庫本では「菴」とある）。調べるほどに根拠薄弱な解釈によって、「邪馬台国」論争が展開していると見た古田は、根本に立ち返って、三世紀当時の数理を復元し、里程計算（短里法…一里＝約七五メートル）、年数計算（二倍年曆…現在の約六カ月＝一年）を行ない、「倭人伝」記載通り

の地理復元を試みたのである。

詳細は略すが、その結果、「邪馬壹国」は、博多湾岸とその周辺を指定し、東南方向へと「女王を去る四千余里」の「侏儒国」は、高知県の足摺岬近辺。そして誰もが無視してきた「裸国・黒齒国」の場所について、驚異の結論を導き出した。

「倭人伝」には「船行一年」とあるから、長期間無寄港の舟航となる。よって南西諸島からフィリピン諸島、あるいは小笠原諸島からミクロネシア、といった南方の島嶼領域ではありえない。黒潮に逆らう航行になつてしまふことも、不可能ではないとしても難点だ。だからやはり、太平洋横断が自然な行きかたとなる。

古田の復元によれば、当時は「二倍年暦」なので、「船行一年」は約六カ月。

これに、現代日本人による太平洋横断の成績を代入してみる。

一九六二（昭和三七）年、堀江謙一の西宮→サンフランシスコ間単独帆走（エンジンなし）が九四日（『太平洋ひとりぼっち』角川文庫）。

一九七一（昭和四六）年、青木洋の堺→サンフランシスコ間、手作りヨットの単独帆走が八二日（『海とほくの信天翁』PHP研究所）。

抗力との両方向ベクトル（⇔）を、竜骨を中心し、進行したい方向へV字形に傾斜させるらしい。それによつて、引いた弓を放つような合力ベクトルが発生し、風に対して斜め前方への推進力を得る。

こうして帆走する場合のタッキング（ジグザグ）航法の効率（前向き角度）に関しては、近代ヨットのほうが古式の帆船より性能は上だが、わざわざ向かい風である、北東からの貿易風が卓越する時期に航海する必要はない。追い風となる北西季節風の卓越しやすい時期などを利用すればよいわけである（ちなみに堀江謙一は、今年二〇〇八年七月に、波の力だけを動力とする波浪推進船で、紀伊水道→ハワイ間往復航海に成功している。自然の力いかに利用するかを第一義にすれば、道具作りの可能性は際限なくありうるということだ）。

なので、近代ヨットによる成績と、昔の帆船との成績とは、あまり差がないものとみなして、残り三カ月をサンフランシスコから南下してみる。

こうして古田のたどり着いた結論が、「裸国・黒齒国」は赤道を越え、南米大陸西海岸北部、すなわちエクアドル、ペルーの地というものだったのである！

私の夢想は、ちっとも夢想ではなかった。まだ実証されたと断定はできないまでも、論理的には符合する。

このほかにも古田は、

- ・鹿島郁夫
- （一九六七、ロサンゼルス→横浜、三カ月と十日）
- ・牛島龍介
- 往路（一九六九、博多→サンフランシスコ、二カ月と二十日）
- 復路（一九七〇、エンセネダ《メキシコ北端》→博多、二カ月と二七日）

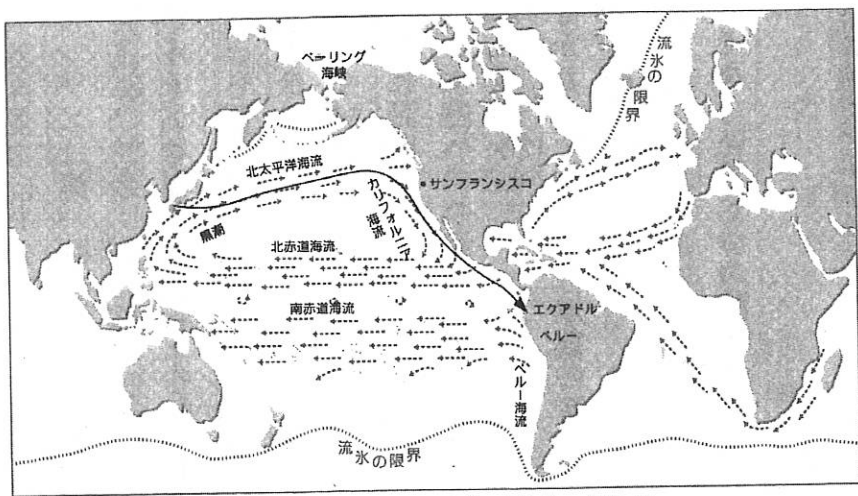
といった記録をあげている。

つまり平均して約三カ月ということになる。

「水と食糧」に関する青木洋の証言によれば、壺と釣針と糸があれば生き延びられるという。一週間に一度は大雨が降るのでそれを壺にためる。海の魚が勝手に舟に飛び込んでくるので解体して餌にすれば、マグロなどの大物がかかってくる。こうした魚からも「水分」は補充できる。堀江謙一の日誌でも、両掌で輪を作つて海水に浸していると、サバなどの魚がわざわざその中に入ってきてかたんに手づかみできたところ（『太平洋一人ぼっち』一三九頁）。

逆風時には、向かってくる風に対して船体ごと帆を斜めにして受け流す。側面から押される揚力と反発する抵

古田説による「邪馬壹国」から「裸国・黒齒国（エクアドル・ペルー）」への推定航路



増田義郎「太平洋—開かれた海の歴史」に本荘加筆



また、現代の採集事例だが、コロンビアの太平洋沿岸やエクアドルの中部に、歯を黒く染める風習があることを、ラテン・アメリカの歴史・文化人類学者増田義郎が紹介している（『太平洋―開かれた海の歴史』二〇〇四年集英社新書 一九頁）。

## 「四柱の論証」

さらに、他分野の研究成果からも、古田の説と一致する見解が現われた。古田自身は、自説も含めて「四柱の論証」と呼んでいる。

一つはアメリカのスミソニアン博物館研究員エヴァンズ夫妻による学術報告（一九六五年）。アマチュア研究者エミリオ・エストラーダが気付いた、エクアドルのバルディビア遺跡の土器と日本の縄文土器との相似を問題点とし、エヴァンズ夫妻が協力してまとめたものである。縄文土器は一万年の歴史を経て変化成熟し、多様化してゆくが、バルディビア土器には、そのような前時代から後世への連続性が見られない。それだけでも他地域からの伝播を考えなければならないところ、ちょうど同時代の、日本の縄文中期遺跡から出土する土器の特徴と、著しく一致する。

は、ベーリング海峡（カムチャツカ半島東北部の半島と、アラスカとの間）を移動した人々ではない。いかに地球が温暖化しても、北極圏の気温が二十二℃をこえることは、考えにくいからである。

この寄生虫の、放射性炭素年代測定（生物遺骸の炭素化合物中の炭素に、1兆分の1以下の程度で含まれる、放射性同位体元素、炭素14の崩壊率から年代を推定する方法。精度は50年程度）値は、縄文中期（紀元前三〇〇〇年頃）〜弥生期（西暦三〇〇年頃まで）と、かなりの幅を持つが、いずれにせよその時代の太平洋横断は、定説になっていないのだから、新学説へのかなり有力な状況証拠となるのである。

そして四つ目が、古田の「三国志魏志倭人伝の論証」となる。

## 太平洋「天岩戸神話」分布

私からもひとつ付け加えると、文化人類学者石田英一郎の一九四八年の論文、「隠された太陽―太平洋をめぐる天岩戸神話―」（『桃太郎の母』講談社学術文庫所収）をあげたい。

日本の天岩戸神話と同様の要素を持つ太陽神話が、

そうしたことから、「日本列島からエクアドルへの、縄文中期における文化の伝播」という学説を世界に問うた。

なんと、「縄文人の太平洋横断説」、である！

反論も多いが、否定されきってはいないようだ。

二つ目。「HTLV (human T-cell leukemia virus: ヒトT細胞リンパ球ウイルス) I型の論証」(一九九四年)。愛知ガンセンター疫学部長田島和雄による報告。

日本列島の太平洋岸（沖縄・鹿児島・高知県足摺岬・和歌山・北海道）の現代の住民に分布する、成人T細胞白血病の病原体ウイルス（HTLV）のI型と、同一のウイルスが、南米北・中部山地のインディオの中にも濃密に発見された。これによって、両者が「共通の祖先」をもつことが推定されるに至った。

三つ目。「寄生虫の論証」(一九八〇年)。ブラジルの寄生虫研究グループ（アウラージョ博士代表）の報告。南米の北・中部に分布する、モンゴロイドミラの体内や野外に化石化して存在する「糞石」の中に多い寄生虫が、アジア産、ことに日本列島に多いものと判明した。

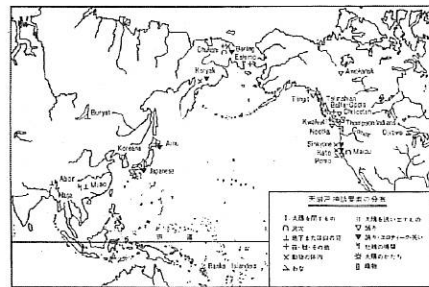
しかもこの寄生虫は寒さに弱く、二十二℃以下では死滅してしまふ。したがって、この寄生虫を保持した人々

環太平洋各地に分布することを示した労作である。天岩戸神話の概要は以下の通り。

海原の統治を命じられたスサノオが、妣の国根の堅州国に行きたいと、激しく泣き続ける。怒ったイザナギによって追放されるが、その前に姉である太陽神アマテラスに会いさつしようとして天に舞いのぼる。弟の真意を疑ったアマテラスは、天の安川の誓約をともに行なう。賭けに勝ったスサノオは、動物を殺戮し、機織り女を死に至らせ、乱暴狼藉がやまない。アマテラスは天石屋戸にひきこもり、この世も暗闇と化す。八百万の神々は、アマテラスを誘い出そうと、鳥を鳴かせ、鏡や勾玉を製作し、祭りの準備を行なう。クライマックスでウズメの腹に、踊り始める。神々の狂騒は頂点に達する。不審に思ったアマテラスが岩戸を少し開けると、待ち構えていた手力男によって一気に引っ張り出され、この世に太陽が復活するという筋。

以上の、傍線を付した神話要素を中心に、同様のモチーフが布置された神話が、石田の調査によれば太平洋を取り巻くようにして分布するというのである。メラネシア、インドシナ半島、中国大陸江南地方、韓国、北海道アイヌ、カムチャツカ、ベーリング海峡、そして、北米大陸の西海岸沿い。

この場合は陸上の伝播もありえただろうが、石田作成図にみられるように、アメリカ側ではベーリング海峡からカナダの海岸山地帯までの間に、分布の空白地帯がある。むしろカナダ、アメリカ西海岸に分布が集中していることを重視すると、ちょうど日本からの黒潮く北太平洋海流がぶつかってくる範囲とみることもできるのである。



石田英一郎「隠された太陽」より

### 丸木舟最強説

しかし、こうした状況証拠がいくらあがっても、多く

人」一九九九年 小学館 橋口尚武論文参照。

だから基本的には陸を見ながらの沿岸漁業・航法であって、遠洋航海はしていないはずだと、多くの研究者は考える。

だがそれはどうやら、造船専門家の意見を聞かずに判断したものであったようだ。

これも古田武彦による聞き取り調査なのだが、さもあらんという話が紹介されている（『海の古代史』一四五頁）。

つまり、実は、造船船の方こそが、遠洋航海には向かない、というのが造船関係者の見解だと言っているのである。

言われてみればあまりにも当たり前のことだ。構造船とはしよせん人間が木材を組み合わせたもので、嵐にあえばそんな人工物はバラバラになってしまう。それに対して、一番強いのは丸木舟で、次が筏である。丸木舟は転覆してもそれをひっくり返せば元に戻るし、筏も綱がゆるむといけなが、船上でかんたんに修理ができる。

こうした話を聞くと、かえって、古墳時代以降、文献や実物など、せっかくなまざまな史資料が増加しても、太平洋側への遠洋航海の記録がなく、東シナ海を渡るだけの遣隋使や遣唐使ですら、困難を極めたという事実に得心がいく。皮肉なことに、構造船時代に入ったこと

の考古学者や歴史学者が難色を示すのは、当時の船の構造を明確に把握できない点である。何しろ太古の船の資料があまりにも乏しい。

『古事記』の仁徳天皇記の掉尾を飾るエピソードに、「枯野船」がある（『日本書紀』では応神天皇紀三年八月条）。日本列島において古代船が残りにくい事情を暗示する事例としても、よく引き合いに出されるものである。

一本の高樹があった。朝日に当たるとその影は淡路島に達し、夕日に当たると影は高安山を越えた。この樹を切って作った船は、たいそうな快速船となった。枯野という。この船によって朝夕、淡路島の清水を汲み、天皇の飲料水として献上した。やがて船は破壊されて、塩焼きの薪とされたが、焼け残った部分があるので、その木を琴にした。その音は七里に響いた。

という具合で、古代人は生活の用具を徹底的に再利用、リサイクルし、最終的に燃料になりうるものは、あとも残らない運命にあったのである。

そうした事情をかんがみても、縄文時代の船は、発見されている若干例（関東地方の茨城・千葉・埼玉・神奈川の場合で総計二四艘という）から推察するに、基本的に丸木舟であつたらう。筏や準構造船、構造船などは、右の事情もあつてか、発見されていない（『海を渡った縄文

で、遠洋航海は廃れたのだ。

大型構造船を建造したことで物資の運搬は便利になつても、嵐に弱く、かなりの重量を積載することで吃水（船体が沈む深さ）も深まる。海底地形に不案内なところを航行すると座礁（水面下の岩や浅瀬に乗り上げてしまうこと）しやすいだろう。実際遠洋でそのようなことが起きたら一巻の終わりである。

### ポリネシアンの航海術

では実際のところ、丸木舟による遠洋航海というのは、どうなのであろう。

水と食糧については青木洋の証言のごとく、多少の蓄えを積み込むにしても、洋上調達できるものであるからよしとして、まだだれも（当然私も）納得のいく解決法を見つけていないのが、防寒方法である。エスキモーのように、獣皮を使ったスーツのようなものがあつたかもしれないが、これは保留とするしかない。

カヌーを使った航行技術については、霊長類研究者片山一道の『海のモンゴロイド』（二〇〇二年 吉川弘文館）や、人類学者後藤明の『海を渡ったモンゴロイド』（二〇〇三年 講談社選書メチエ）に、ポリネシア人の生

活文化・技術として詳しく述べられている。

詳細はそちらに譲ってポイントだけ述べると、身軽に長距離航海するなら片側舷外浮材付丸木舟、複数の乗員や物資の積載が必要なら、二連横隊丸木舟にして、二つのカヌーの上に床板を載せ、床板の上に小屋のようなものを設置する。

こうして、基本的には順風の時期を選んで舟航する。逆風を行かねばならぬ場合は、たんなるタッキング（ジグザグ）航法よりは、シャントイング航法（ジグザグの方向を変える時に、船首と船尾も交代する。箱根登山鉄道の上り方と同じ）でアウトリガーを常に風上側に保つ。風下側にあると、風によって沈む力が加わり、減速して不安定となるらしい。



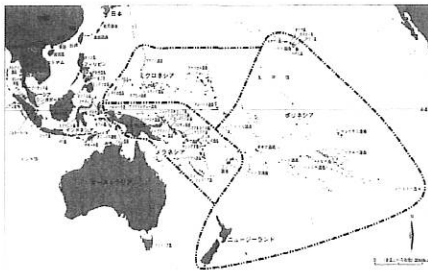
シングル・アウトリガー・カヌー

## われわれは「インコントロイズ」

いつまでも日本の話、磯部や海部の話に戻らないことに疑問を感じている人もいるかもしれない。もともと今回はそれらの生息に迫る予定であった。

いずれにせよ今回私が試みたかったのは、国家・国土・国境といった枠組みをいったんぶっ壊し、なるべく原初の大局に立ち返って考えてみることである。なので、予定変更というより、どんどん調べていったらこうなってしまった、というのが正直なところなのである。

もちろん、森を見て木を見ずでは、それぞれの地域風



後藤明「海を渡ったモンゴロイド」より

こうしてポリネシア人たちは、北はハワイ、南はニュージーランド、東はイースター島を結ぶ、地球の表面積六分の一以上を占める大三角圏を、縦横無尽に行き交った（片山前掲書）。片山の計算では、ニュージーランドを除けばすべての島をたし合わせても日本の九州くらいの大さきにはかならないというから、まさに海上が生活の基盤で、島は仮の繫留地（けいりゅうち）でしかないわけだ。

洋上での位置の認識にしても、南半球が主な海域だから北極星は基本的に見えない。なので南十字星の南中時や、特定の星座の出現・没入の位置などで、方向を確認する（後藤前掲書）。

青木洋が、イースター島の地元老人の話を書き留めている。この老人は全長六メートルのカヌーで、直線距離だと四五〇〇キロほどであろうか、タヒチ島まで何度も航海していたらしい。洋上で直進するなどありえないから、実際はもつとんでもない距離を、日常の営みとして舟航していたわけである。

ある時老人は青木に夜空を示して、「あれがウルアヒアヒ、タヒチの星」と教えたという（『海とほくの「信天翁」』七六頁）。その地域独自の天測航法があったということだ。

土に根ざした文化特性を見失うことにもなる。そうならないためにも、たとえば博物学者南方熊楠ではないが、世界大での思考もすれば粘菌の生態研究にまで没頭する柔軟性が、だれにでも要求されるべきだと思う。

考えてもみてほしい。

広大なポリネシア海域を自在に舟航できるのなら、メラネシア、ミクロネシア、フィリピン諸島、南西諸島、日本まで、絶えず飛び石の道筋がついているようなものではないか。ポリネシア人や、あるいは彼らと同等の文化を身につけた者ならば、この海域では庭を散歩するようふるまえるはずだ。

本誌に「西郷隆盛」を連載していた上田篤も、その第二回の時に、西郷と、ポリネシアン力士武蔵丸光洋との、風貌・体軀の類似から、西郷家にポリネシアンの血が流れていたのではないかと推測していた。さらに、アジア各地の、さまざまなモンゴロイド分派の顔が、日本の電車一両の中に寄せ集められているというドイツ人の感想を通して、日本は「単一人種単一民族」ではなく、「多人種単一民族」なのだとの端的に指摘した（本誌二〇〇八年二月号）。

こうして様々な文化との交流を通じて、生活の糧・資源や知識・技術などの情報を獲得しようと、環太平洋の